

## 公益社団法人日本心理学会研究集会等助成金成果報告書

代表者氏名 (ふりがな)	山崎 晃男	所属	大阪樟蔭女子大学
研究集会等名称	公益社団法人日本心理学会聴覚心理学研究会		
成果概要	<p>1) 参加人数 (会員・非会員及び認定心理士の人数を記載してください)</p> <p>会員 12 名 (うち認定心理士 1 名) 非会員 13 名 (うち認定心理士 0 名)</p> <p>2) 集会等の目的・成果等 (実施内容・成果・将来計画等を用紙範囲内に記載してください)</p> <p>2011 年度は 2 回の研究集会を開催した。</p> <p>2011 年 7 月 30 日 (土) には、大阪樟蔭女子大学において、スウェーデン、ストックホルム大学のペトゥリ・ラウッカ准教授を招いて「音声と音楽の情動表現」と題した講演会を開催した。音声と音楽の情動表現については、音響的な類似性が多い研究者によって指摘されている。しかし、それらの研究者の多くは音声もしくは音楽を主たる研究対象としている。それに対して、ラウッカ准教授は音声と音楽の両方を研究対象としている数少ない研究者であり、当該テーマの研究の現状や将来望まれる研究などについて非常に興味深い話を聴くことができた。</p> <p>2012 年 2 月 27 日 (月) には、小林理学研究所において、「音と安全」をテーマとするラウンド・テーブル・トーク・イベントを開催した。生活環境における安全確保は聴覚の重要な役目である。また、近年、ハイブリッド車の静音化への安全対策として音発生器を車載することが義務付けられたり、自転車運転者のポータブルプレーヤー利用が原因となる接触事故が多発したりするなど、音と安全を巡る問題が社会的な話題となっている。そこで、警報器の音について研究をしている水浪田鶴氏 (産業技術総合研究所)、騒音問題を研究する森長誠氏 (防衛施設周辺整備協会)、サウンドスケープの研究者である小松正史氏 (京都精華大学) の三者を話題提供者として、安全のための音の利用、音による安全の阻害、音環境からみた音と安全、といった様々な視点から音と安全についての話題を提供いただいた後、イベント参加者全員による自由な討議をおこなった。音と安全の問題は、音そのもの、音の発生メカニズム、音に対する長期的な経験・学習、安全のために求められる行動、音以外の感覚との交互作用、といった多くの側面から検討していく必要があるといった議論がなされ、参加者はそれぞれに今後の自分の研究に対するヒントを得ることができた。</p> <p>2012 年度は、「聴覚の進化」をテーマとするワークショップを、日本心理学会第 76 回大会において開催する予定である。このワークショップでは、聴覚の進化の流れに位置づけたり他種の聴覚系と比較したりすることで、人間の聴覚系についての理解を深めることを目指している。</p>		